

「本当にそうなのだろうか？」

ユダヤ教には、「バル・ミツワ」という成人式があります。対象年齢は 13 歳ということで、かなり若めの設定です。この成人式を終えると、旧約聖書における律法の書、つまり、最初に収録されている 5 つの書物を、人前で朗読したり、その意味を解釈したりすることが許されるようになります。日本の成人式と違って、とても宗教的側面の強い成人式と言えますね。このユダヤ教の成人式である「バル・ミツワ」の場合、人前で聖書を読んだり、解釈したりすることをできるようになるためには、そのための訓練も必要になってきます。この訓練は、いわゆる「詰め込み教育」的な感じで、キリスト教における信仰問答、カテキズムと似ているかも知れません。一問一答の形で、ひとつの問いに対して、定められたひとつの正解が用意されていて、その定式化された言葉を暗記していくということです。だから、面白いか面白くないかと言えば、きっと面白くない部類に入ろうかと思いますが、とにかく、ユダヤ教において、その信仰問答を憶えないことには、成人できない、という伝統があるということです。そして、もちろん、優秀な成人とは、スラスラと答えを述べることができる 13 歳ということになります。ただ、これは私の神学部にいた頃のユダヤ学の教授の言葉ですが、「一般的な優秀な人は、たとえばバル・ミツワで正しい回答をするような人だけれども、学問的な意味で優秀な人は、“それって、何故だろう？”という疑問を持つ人ですね」と。「何故？」という問いを忘れない人のことを、ある意味で、優秀な人であると言えるんじゃないか、と。ユダヤ学を教える教授は、そう語ったわけです。

「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子供たちも、家畜までも渴きで殺すためなのか」。さて、今日の聖書箇所冒頭部分に横たわっている、この辛辣な問い掛けも、イスラエ

ルの民の優秀さを示す一例なのか、どうか。まあ、ちょっと良く分かりませんが。ただ、これを単なる不平不満とだけ捉えて、イスラエルの民の不信仰と処断するのは、ちょっと浅い考えのように感じます。と言うのも、私たちが常日頃、祈る時の言葉に「何故？」という問いを含むことがあるからです。「何故、戦争が起こるのか」「何故、災害が起こるのか」「何故、こんな目に遭うのか」「何故、上手くいかないのか」。ある意味、信仰を持つと言うのは、信仰すべき神様を知っているからこそ、あらゆる事柄に対して、立ち止まって思いを巡らせるということです。神様なんて知らなければ、ただの偶然、ただの事故に過ぎない出来事も、そこに「神様の御心があるんだ」という信仰が入ることで、「では、何故、こんなことに？」という問いが生まれてきます。その問いは、多分、神様のことを知れば知る程、神学の知識を蓄えれば蓄える程に、深まるんじゃないかと思えます。決して、一問一答形式でスッパリと割り切ることのできる信仰には至らないでしょう。少なくとも私は、神様に問い掛けないことが、信仰の最終形態とは思いません。神様のことを信じるからこそ、何故ですか、どうしてですか、と問い掛け、祈りを通した対話を続けていくこと。そういう信仰の形も、きっと大事だと思います。その問い掛けに対して、必ず神様が答えてくださると信じて、祈る姿勢も相応しいんじゃないかと。

今日の聖書箇所において、3節で民衆から辛辣な問い掛けが沸き起こります。その問い掛けに対して、4節でモーセさんは「うるさい。黙って従いなさい」と民衆を制するのではなく、「わたしはこの民をどうすればよいですか？」と、モーセさんもまた、神様に問い掛けるんですよね。しかも、そう叫んだと書かれています。民衆から届く「何故？」に対して、モーセさんは明確に答えるのではなく、モーセさんも神様に対して「どうしましょうか？」と尋ねている。本当に、モーセさんという人は愛すべき哀れな中間管理職だと思います。決して、強くて賢い指導者ではなかったのです。そんなモーセさんに、少なくとも私は励まされるし、慰められることもあります。

さて、そんなモーセさんの切実な叫びに対して、神様は答えてくださいました。「そんなことを聞いてはならない」と言って、あしらうのではなく、その叫びを受け止めてくださったのです。そして、「民に対して、頑張れと言いなさい」と綱紀肅正、締め付けの強化を図るのではなく、「水が出て、民は飲むことができる」という慈しみ深い解決策を示してくださったのです。

もっとも、確かに、神様の御心を慮るなら、「文句ばかり言わずに、真っすぐ歩きなさい」と仰りたかったのかも知れません。「そんなことで一々立ち止まるとは何事だ」と。だから、7 節において、この出来事を忘れないようにとの考えから、場所の名付けがなされています。この一悶着と問い掛けの出来事がなされた場所は、マサとメリバと呼ばれるようにと。「試し」と「争い」という、褒められたものじゃない名前が与えられました。この名付けの記憶は、この出来事が反省を伴うものであることを示しています。決して美談ではないんだよということです。「この出来事から、ちゃんと学ぼうね」という教育的意図が含まれています。「果たして、主は我々の間におられるのかどうかと言って、モーセと争い、主を試したからである」という少々深刻な方向へ誘導された総括文も、これが褒められた記憶じゃないことを念押ししています。

でも、神様の愛や恵みと言うのは、そういう人の過ちや失敗の中で輝くものでもあります。今回の聖書箇所も、イスラエルの民の不信仰を咎める目的がある一方で、その中でなお溢れ出てくる神様の優しさがあります。この 17 章の小見出しになる「岩からほとぼしる水」とは、厳格堅固な神様の岩のような御心から、それでも尚、ほとぼしり溢れてくる恵みと癒しの御業のことを示唆しているのかも知れません。確かに、神様に疑問を抱くこと、叫んでまで問い詰めることは、美しい信仰者の姿とは言えないでしょう。でも、そんな美しくない、格好悪いところに御手を差し伸べてくださるのが、私たちの神様なのです。「やれやれ、仕方ないな」と言いながら、愛と慈しみを垂れてくださるのが、イエス・キリストの神様なのです。

思えば、主の十字架へ至るまでの道のりには、疑問や問い掛けどころではない、嫌悪や憎悪の叫びがありました。「本当に神の子なら、自分を救ってみればいいじゃないか」という愚かしい問いが満ちていました。今を生きる私たちの間にも、「本当に神様がいるなら、イエス様がいるなら、なんでこんな不幸があるのだろうか」という疑問が見え隠れします。この疑問が極まれば、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」という、神様の存在自体を信じられなくなるような疑心へと繋がることもあると思います。しかし、その深刻な問い掛け、深刻な疑心暗鬼に対して、神様は答えてくださるのです。「見よ、わたしは、あなたの前に立つ」と。きっと私たちが抱くであろう、あらゆる信仰の問い掛けに対して、神様やイエス様は、否定のしようもないくらいに明らかな形で、そして、ありがとうと言いたくなるくらい恵み豊かに、答えてくださるに違いない、と私は信じています。

主の十字架にしても、救いの約束にしても、「本当にそうなのだろうか？」という疑問を持つことからスタートする、すべてを包み込んで優しく満たしてくださるゴールがあることを、私たちは信じて歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちのために尊い安息日を備えてくださり、ありがとうございます。私たちの日常は、常にあなたへの問い掛けと隣り合わせにあります。信じ抜きたいと思いつつ、信じることを躊躇い、疑い惑うことから逃れられない私たちの信仰の姿があります。しかし、神様。そんな私たちの問い掛けや躊躇いに対して、あなたは必ず答えてくださいます。見よ、わたしはあなたの前に立つ、と言ってください。そのように信じて、今日から始まる新しい1週間も、主の十字架を憶え、その贖いと救いがあることを心に留めつつ歩んで参ります。どうか、私たちの信仰の歩みを、あなたがしっかりと支え、あなたへの豊かな信頼で私たちを満たしてください。このお祈りを、十字架の主であるイエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

3月召天者を憶える祈り

聖書：ヨハネの黙示録7章13～17節

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

- | | | |
|--------|----------------|----------------|
| 羽根一夫兄 | はね かずお けい | (1972年3月1日召天) |
| 関谷正夫兄 | せきや まさお けい | (2020年3月3日召天) |
| 村重隆一兄 | むらしげ りゅういち けい | (2016年3月4日召天) |
| 牧野よし姉 | まきの よし し | (1949年3月10日召天) |
| 高木はるゑ姉 | たかぎ はるえ し | (2020年3月11日召天) |
| 畑 禎子姉 | はた ていこ し | (2017年3月15日召天) |
| 皆川ふみ姉 | みながわ ふみ し | (2016年3月16日召天) |
| 中野 操姉 | なかの みさお し | (1995年3月19日召天) |
| 平岡重太郎兄 | ひらおか じゅうたろう けい | (1955年3月21日召天) |
| 寺島すゑ姉 | てらしま すえ し | (1974年3月24日召天) |

神様。寒さを憶えつつも、時折、降り注ぐ日差しに暖かさを感じるこの季節。私たちは3月にあなたの御下へと召された信仰の先達を憶えて祈りを捧げています。1年の一巡りの中に、あなたは春夏秋冬を定められたように、人の一生にも様々な季節を定められました。順風の時、逆風の時、幸せな時、不幸な時、喜びの時、悲しみの時。今、名前を読み上げ心に留めている3月の召天者の方々も、そんな色鮮やかな人生を全うされ、走り終え、あなたの御下へと旅立たれました。どうか、先に召されし敬愛すべき兄弟姉妹の、その人生に備えられた喜怒哀楽を、あなたが御心に納め、そして、その生き様に相応しい豊かな平安と祝福とで、この方々の魂を満たしてください。そして、未だ地上での歩み続ける私たち一人一人に十分な励ましと、進むべき道標をお与えください。天にあって、地にあって、あなたと共なる恵みに与ることができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。